



問 題

次のA～Dの4つの文章は、古代ローマの皇帝でストア派の哲人でもあるマルクス・アウレーリウスの『自省録』から採られたものである。これらの文章を読み、対応する解答欄A～Dに、それぞれの文章に関して設定されている問に対する解答を記しなさい。

なお、本問は、ストア哲学に関する解答者の知識を前提とするものではなく、A～Dの文章から理解できることを基礎として各問への解答を記すことを解答者に求めるものである。

[解答作成上の注意]

- ・ A～Dの4つの解答はそれぞれ独立のものとし、独立に採点を行う。
- ・ 各解答は300字以上500字以内とする。
- ・ 本問の各問は、特定の正解の存在を措定しているものではない。

A 公益を目的とするのでないかぎり、他人に関する思いで君の余生を消耗してしまうな。なぜならばそうすることによって君は他の仕事をする機会を失うのだ。すなわち、だれそれはなにをしているだろう、とか、なぜとか、なにをして、なにを考え、なにを企んでいるかとか、こんなことがみな君を呆然とさせ、自己のうちに指導理性を注意深く見守る妨げとなるのだ。したがって我々は思想の連鎖においてでたらめなことやむなしいことを避けなくてはならない。またそれにもましておせっかいや意地の悪いことはことごとく避けなくてはならない。そして突然ひとに「今君はなにを考えているのか」と尋ねられても、即座に正直にこれこれと答えることが出来るような、そんなことのみ考えるよう自分を習慣づけなくてはならない。

[問] この主張を論評しなさい。



B すべての出来事は正しく起る。もし君が注意深く観察するならばこのことを発見するであろう。私がいうのは単にことの成行として起るというのではなく、正義にしたがってであり、またあたかも或る者がめいめいにその価値にしたがって分前をあたえるかのように起るというのである。

[問] 日本社会の現状と関連づけて、この主張を敷衍しなさい。

C 渦巻に足をさらわれてしまうな。あらゆる衝動において正義の要求するところに添い、あらゆる思念において理解力を堅持せよ。

[問] この主張を、法曹としてのあるべき姿を説くものとして、具体例をもって展開しなさい。

D 或ることをなしたために不正である場合のみならず、或ることをなさないために不正である場合も少くない。

[問] 現在の国際社会において、この主張の後半部分があてはまると考えられる事象をひとつ選び、それをこの主張に即して説明しなさい。

[出典] マルクス・アウレーリウス『自省録』神谷美恵子訳（1956年 岩波書店）